書　評

林語堂（鋤柄治郎訳）『中国＝文化と思想』（講談社学術文庫、2000 年）

朱 健姣

本書は林語堂（Lin Yutang、1895－1976　享年 80 歳）が 1935 年に英語で書いた *My Country and My People*（Reynal&Hitchcock, 1935）の日本語訳である。本書は林語堂によって、中国と中国人について率直に書かれた本といえ、林語堂研究にとってだけでなく、中国を理解するうえでいまだ価値があると評者は考えている。それゆえ 80 年前の著作（翻訳から 15 年）であるが、あえて論評することとした。

本稿では、内容紹介に先立ち林語堂の略歴と本書の出版の経緯について紹介しておきたい。林語堂は福建省竜渓県（現漳州平和県）坂仔村のキリスト教家庭に生まれた。1916 年に上海セント・ジョンズ大学を卒業し、清華大学で英語学教師として働いた。そのあと、アメリカ、ドイツに留学した。1923 年に帰国後、北京大学英語学教授に就任した。その期間、雑誌『語絲』でエッセイや評論を発表し始めた。軍閥政府の弾圧によって、北京を去り、アモイ大学に就任し、そのあと、武漢政府の外交部で働いたが、半年後、辞任した。英文雑誌 *The China Critic* などで論陣を張った。1932 年から 1936 年にかけ『論語』『人間世』『宇宙風』などの雑誌を発行し、さまざまな分野に私見を述べ、小品文という文体を提唱した。1935 年以来、アメリカを拠点として、英語で次々と *My Country and My People*、*The Importance of Living* 、*The Wisdom of Confucius*、 *Moment in Peking* 、*A Leaf in the Storm* などの代表作を出版した。1947 年から、三年間ユネスコ芸術部長に任じ、1954 年、シンガポールの南洋大学の初代学長に就任した。1966 年に台北に移住し、その後、香港との間を往来し、1976 年 3 月 20 日に香港で没した。なお 1975 年に国際ペンクラブ副会長に推薦されている。

My Country and My People が出版されたのはパール・バックのおかげである。パール・バックはアメリカ出身の作家であるが、小さいころから宣教師であった父に中国に連れられ、40 年にわたって中国で暮らしていた。彼女

は中国を題材として文学活動を行うのみならず、中米間の交流活動にも目を向けた。彼女は西洋人のために、英語で中国の基本的精神を余すことなく反映した真実の本を書く人を待ち望んでいた。1920、30 年代に林語堂は文学の分野で活躍していた。さらに、林語堂自身も中国に関する本を書くつもりであった。こんなタイミングで、二人は出会った。パール・バックに誘われて林語堂は英語で *My Country and My People* をかいてアメリカで出版した。この著書はアメリカでベストセラーになった。序文でバックは「本書はこれまでに出版された中国を論じた著作の中で、最も真実みに溢れ、最も造詣が深く、最も完全で、最も重要な著作である」と評価している（p.10）。

本書の構成は以下のとおり。パール・バックの序文、自序、背景、巻頭言、第一章「中国人」、第二章「中国人の性格」、第三章「中国人の精神」、第四章「人生の理想」、序言、第五章「女性の生活」、第六章「社会生活と政治生活」、第七章「文学生活」、第八章「芸術生活」、第九章「生活の芸術」である。

中国論についての著書がたくさんあるが、本稿では柏楊の『醜陋的中國人』（藝文圖書公司 、1987 年、本書には張良澤・宗像隆幸による日本語版（『醜い中国人』光文社、昭和 63 年）がある）と加藤徹の『貝と羊の中国人』（新潮社、2006 年）をとりあげ、本書の特徴を明らかにしておきたい。中国人の書いた近年の中国論のなかでも『醜陋的中國人』の論点は極めて厳しく率直なものなので、社会でも学界でも話題になった。したがって、この度はこの本を取り上げて、林語堂の観点と対照しながら、論じたい。また中国人以外の学者はたがどういうふうに論じているのかをあきらかにしたいので、日本人の中国人論として評価の高い『貝と羊の中国人』をとりあげる。

評者の見方ではどんな国の人の性格、精神構造を分析しても、その国の文化と環境を見逃してはいけないと考えている。文化と環境はいい影響と悪い影響をもたらしたはずである。現代の私たちが伝統文化を論じるということの価値は、現代の人間、社会だけでなく、将来の人間、社会に役立つことにある。林語堂と柏楊は二人とも、中国文化の短所と長所を独自な観点から考察する。どちらも説得力をもって現代の人間、社会にヒントを与えられる。したがって、中国人論、中国文化論を通じて中国人の劣等性、社会の欠点を改善することが、これらの著書の意義であると評者は考えている。

林語堂は第二章で忍耐、無関心、老獪が中国人の最悪の三つの特徴と見なし、円熟した消極的な性質を持っているとし、平和主義、足るを知る精神、ユーモア、保守主義がプラスのイメージを持っていると考える。さらに、それらの根源と影響について詳しく分析したが、欠点が生じた原因について以下のように捉えている。「忍耐」は人口の過密や経済の圧迫などの生存空間で民族全体が適応しようとした結果生じたもので、「無関心」は個人の自由が法律の保護や憲法の保障を受けていないことによるもので、「老獪」は道家の人生哲学の影響によるものである（p.87）。これらの性格は中国人が中国という特定の文化と環境の中で数千年にわたって形成された結果であるとされている。『醜陋的中國人』の第五章「中国人の精神構造(Ⅰ)――老人惚けの大展覧会」は、中国人の精神構造の悪さを「大胆に考え、話す精神の欠乏、権威、権勢に対する畏敬、人間性の欠乏、面子を重視すること、利己心、聡明すぎて同情心が失われること、保身第一、一歩退くこと」にまとめる。柏陽はそれらの原因を彼の命名した「醬缸文化」（漬物甕）の中国五千年の伝統文化に帰結する。第二章「漬物甕文化――醜い中国人の原点」では儒教思想の影響でこの文化が形成されたとしている。さらに儒教思想が統一されてから一つの公式になったので、中国の知識人の思考能力、想像力、鑑賞能力は失われてしまったと解釈する。両者の評価は基本的に一致しているのである。

林語堂は第一章で中華民族は文化の安定性（特に、漢語）、環境に対する適応力、異民族の融合によって世界で生き延びていると述べた。『貝と羊の中国人』の「貝の文化　羊の文化」では二種類の祖先が言及され、「漢民族」の祖形について検討している。つまり、「漢民族」は昔の「殷」と「周」という二つの民族集団がぶつかり合ってできた。それは漢語を母語とし、共通の文化や価値観をもつ人々の集団とみなされ、したがって、異民族でも、漢民族の伝統文化を受け入れて同化すれば、漢民族と見なされたというふうに理解している。そこから、文化の安定性、異民族の融合は中華民族の存続に大きな影響を与えたと評価されている。それだけでなく、第一章で林語堂は、民族の安定を支える文化的要素として、中国の家庭制度と科挙制度をあげている。科挙制度について欠点をもっているが、才能ある者を農村から都市へ不断に供給し、上層階級の活力の低下を補い、社会の健康に必要な内部再生力

に周期的補充を与え、社会を安定させてきたと述べている。さらに統治階級がそれによって農村から来るのみならず、退職後は農村へ帰郷してゆくことを評価している。しかし、『貝と羊の中国人』の「ヒーローと社会階級」では科挙制度は中国三千年の黒幕とよばれる「士大夫」が、文明を乗っ取る手段として位置づけられている。以上のように林語堂と加藤徹は科挙に対して全く異なる評価を行っている。科挙制度が時代の流れにとともに生まれることは、当時の社会の発展を促進するに違いなく、同じく時代を経るとともに、その社会にふさわしくない面が生じ、さらにはその社会の障害になるかもしれない。したがって、評者は二人のどちらも正解であると考えている。したがって、二人の説をまとめていくと、科挙制度のプラスの面においては貴族の特権を打破し、官僚の素質と行政の効率を高め、社会の安定と公平に役立ち、社会の内部再生力を補ったということになる。マイナスの面においては儒学が臣民を奴隷化する道具になり、官僚の数が増えるので、科学技術を研究する人材の数が減っていったということになる。

本書に対して評価できるところはまだたくさんあるが、個人の能力の関係、紙幅の関係もあるのでここまでとしたい。

（zhu.jianjiao@163.com）

参考文献

林語堂(張振玉訳)『吾国吾民』、作家出版社、1995 年

林語堂(合山究訳)『自由思想家・林語堂―エッセイと自伝』、明徳出版社、1982 年

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9E%97%E8%AA%9E%E5%A0%82
（2015.1.30 閲覧）

http://baike.baidu.com/link?url=02oizn-3oqo7lHU_RX-E1EGL8Or3bAzO3Abgo1DjLKFJ_I-sbNyi6oJ3al47cdyGuTe3l2Ydcpj1nHo1_VSN8K
（2015.1.30 閲覧）

http://zh.wikipedia.org/wiki/%E6%9E%97%E8%AF%AD%E5%A0%82
（2015.1.30 閲覧）